



グローバル・スタディーズと経済学

神戸大学 経済経営研究所

日本学術振興会 特別研究員 RPD 内山 直子

私事であるが、今年3月ようやく博士号を取得して長い学生生活にピリオドを打てたことを境に、本格的に常勤ポストを目指した就職活動を始めて約半年となる。私自身の専門は開発経済学とラテンアメリカ研究であるから、就職の可能性としては経済学系と地域研究系の二パターンあるのだが、この半年間で幸運にもラテンアメリカ研究の公募が2件あった。学部時代は地域研究を専攻していたので、古巣への回帰を懐かしく感じつつ、現在の地域研究事情を改めて調べてみると、10数年前とはすっかり様変わりしていた。神戸大学の修士課程に入って以来10年間、経済学はほとんど一からのスタートであったため、とにかく大学院レベルに追いつくために脇目も振らず経済学という「得体の知れない巨人」と格闘する日々を過ごした後、ふと「故郷」の地域研究の世界に戻ってみたら私は文字通り「浦島太郎」になっていたのだ…つまりは、地域研究の「グローバル化」である。

母校を含め、日本の地域研究の拠点で一昔前は「国際学」「地域研究」といった名を冠していた研究科が揃って「グローバル研究」に鞍替えし、ホームページを開けば「グローバル・スタディーズ」の文字が目飛び込んできた。当然、公募時に要求された授業シラバス案の題目も「グローバル・スタディーズ論」。思えば、世の中全般に目を向けると「グローバル」の言葉に溢れ、社会で求められる人材は当たり前「グローバルな」人材である。私を含めさまざまな研究で「グローバル」という用語が当たり前で使用されている。しかし、私はこの「グローバル・スタディーズ」という言葉を目にしたとき、なんともいえない違和感に捕われた。「グローバル・スタディーズ」とは一体何なのだろうか…？「グローバル・スタディーズ論」は（自分ひとりで講義を受け持つと想定した時）どのような構成にできるのだろうか？なんとなくの自覚はあったものの、自分が如何に安易に「グローバル」という用語を使ってきたかを改めて思い知らされた瞬間であった。

まずは「グローバル・スタディーズ論」の教科書がないか amazon.jp で検索してみた。確かに「グローバル」と名のつく教科書はたくさんある。しかし、「グローバル・スタディーズ論」はひとつもなかった（英語ではいくつも見つけたが）。ならば、と、グローバル・イシューを扱った学部向け教科書を探してみた。ところが、経済学、政治学、国際関係学、歴史学など個々の専門分野で「グローバル課題」にフォーカスしたものならいくらかもあるが、分野横断的かつ学部向けのは見つからなかった。やはり「グローバル・スタディーズ」という便利なカタカナ用語が一人歩きしている現状なのだろうか…。

そんな時、日本のグローバル・スタディーズの発端から現状までを知ることのできる興味深い一冊に出会った。『地域研究』という学術誌の「グローバル・スタディーズ」の特集号（第14巻1号、2014年3月）である。以下では、その内容の一部を引用しながら、私なりに「グローバル・スタディーズ」の現状と課題について簡単に紹介したいと思う。

まず、上智大学総合グローバル学部の福武慎太郎先生が総特集にあたり日本のグローバル・スタディーズの変遷を概説しておられる。福武先生によれば、「グローバル・スタディーズ(Global Studies)」は欧米、特に英語圏を中心に 1990 年代以降の世界のグローバル化に伴い、急速に発展してきた学問潮流であるという。しかし、その位置づけと発展過程は欧米と日本で異なっている点に私は興味を引かれるとともに、その過程を知るにつれ、私の「グローバル・スタディーズ」という言葉への違和感の原因が明らかになった気がした。

欧米で初めてグローバル・スタディーズの名をもつ研究プログラムが設置されたのは、1999 年、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校の Global & International Studies Program であったという。その名の通り、それまでの学際的な International Studies に加えて平和・人権・開発・環境といったグローバル課題(global issues)に焦点を当てる研究を Global Studies と呼び、既存の International Studies と並存する形で生まれたのである。ゆえに、欧米の Global Studies はあくまでもマクロ的な視点を出発点としている点で従来の地域研究とは異なっており、欧米では Global Studies の出現は地域研究にとっては「新たな競争者」の出現とみなされたという。

対して日本のグローバル・スタディーズは、既存の地域研究の枠組みを解体することなく、「グローバル・スタディーズ」という新たな「傘」のもとで、学際的・領域横断的な研究、教育が行われている¹。それゆえ、日本においてはグローバル・スタディーズと地域研究は「親和的な関係」にあり、「グローバル人材」という言葉が濫用される中で地域研究は「より良い研究と教育の環境を整備する機会」を得てきた、と福武先生は指摘されている。

さて、日本のグローバル・スタディーズの現状がクリアになったところで、タイトルにつけた「経済学」との接点はどうであろうか。その答えは至って明白であるように感じる。社会科学の一領域として、また、現在の高度にグローバル化された世界が直面するグローバル課題は経済学なしでは語ることのできないものが多く、経済学は必要不可欠であり、その役割はきわめて大きい、と。しかしながら、同誌の特集において計 10 本の地域研究と「グローバル・イシュー」に関する様々な研究論文が掲載されているが、その中に「経済」を扱った論文は含まれていないのである。この点について福武先生は、寄稿を依頼した研究者の論考は概説的であることと具体的な「地域」の事例を挙げて論じなかったが故に、地域研究の論文としては認められず、「コラム」としての掲載許可となり、結果として執筆者自身の辞退により掲載に至らなかったことを報告している² (福武 2014)。日本のグローバル・スタディーズの中核が地域研究であることを如実に表す事例である。そして、私自身が日々感じていることでもあるのだが、地域研究と経済学は折り合いが良くないのである。

¹ 日本で最初にグローバル・スタディーズの構想が持ち上がったのは 1990 年代後半の上智大学である。特筆すべきはこの構想に中心的な役割を果たしたのが地域研究の教員であったという。それゆえ、欧米のマクロな視点からのグローバル・スタディーズではなく、地域研究をベースとしたグローバル・スタディーズが構想された。同大学では CEO プログラムを経て 2006 年に外国語学研究科を改組し、グローバル・スタディーズ研究科が設置された。なお、日本で最初に設立されたグローバル・イシュー（地球規模の諸課題）に取り組む大学院は一橋大学社会学研究科地球社会研究専攻(Institute for the Study of Global Issues)である (福武 2014)。

² 福武先生は、「異例ではあるがこうした特集企画の背景もここに付記することによって、グローバル・イシューに取り組む地域研究とは何なのか、活発な議論が起こることを待ちたい」と述べている (福武 2014)。

上で紹介した特集号では、日本を代表するグローバル・スタディーズ系大学院の先生方（東大・東京外大・上智大・同志社大）による座談会も掲載されている（臼杵他 2014）。その中で同志社大学グローバル・スタディーズ研究科の峯陽一先生は「スペクトラムの二つの極としてのグローバル・スタディーズと地域研究」という考え方を提示されている。同時に、「この二極の立ち位置は非和解的なところもある」と指摘されている。峯先生によれば、その理由は以下である。グローバル・イシューを解決する実践的な学知としてのグローバル・スタディーズを見ると、どうしても普遍主義的な原理³が前面に出てくる。他方、地域研究者の方では多かれ少なかれ相対主義の構え方が共有されており、広域的な地域のフレームを語る場合でも、村レベルのローカルな現場のリアリティが念頭にあるものである。さらには西洋中心主義と普遍主義に対するアンチとしての地域研究の伝統も色濃くあるという。

そこで、峯先生はこの「連続しながら反発しあう二つの原理」に折り合いをつける思考の枠組み⁴（「概念装置」）の存在の重要性を指摘されている。「スペクトラムの中央部分に「概念装置」をはめこみながら、グローバルとローカルの間の往復運動を建設的な形で組織していくような仕掛け」だという。ところで、経済学は究極には「紙と鉛筆」でできる学問（若しくはデータとコンピューター？）だとも言われる。しかし、アダム・スミスをはじめとする、経済理論を生み出した先人たちは目の前の人間社会の営みをとことんまで観察し、それをできうる限り抽象化（普遍化）することによって、その社会の奥にある原理原則を明らかにしてきた。本来、経済学はグローバルとローカルの往復運動を得意としてきたのであろう。ならば、地域研究とグローバル・スタディーズをつなぐ「概念装置」としての経済学の役割には様々な可能性があるように思える。

欧米のマクロ的アプローチとは異なり、「地域に立脚し、地域から世界の変化を見る」アプローチ（臼杵他 2014）を前提とする日本独自のグローバル・スタディーズの試みはまだ始まったばかりである。私自身は、ポストク 1 年目に「グローバル・スタディーズと経済学」という研究者としてチャレンジングな壁に遭遇できた「幸運」に感謝したい。

参考文献：

福武慎太郎「グローバル・スタディーズ—地域研究の地殻変動」『地域研究』第 14 巻、第 1 号、pp. 8-32、2014 年。

臼杵陽他「日本におけるグローバル・スタディーズの受容と地域研究（座談会）」『地域研究』第 14 巻、第 1 号、pp. 33-60、2014 年。

³ 国際的な人権規範や、人間開発などの国際的な規範から問題解決の方向性を導き出そうとする立場（臼杵他 2014）。

⁴ この思考的枠組みを峯先生は、中程度に普遍的、ある程度まで抽象的で、同時に下に下りてくるような「曖昧さの魅力」を備えたものと定義している（臼杵他 2014）。